

第5回日米水道水質管理及び 下水道技術に関する政府間会議

研究第二部

主任研究員

林 栄樹



日米の上下水道に関する情報交換を目的

2009年3月2日から5日の4日間にわたり米国ネバダ州ラスベガスにおいて、「第5回日米水道水質管理及び下水道技術に関する政府間会議」が開催されました。本会議は、日米環境保護協力協定に基づき1971年に日米下水道処理技術委員会として開始された後、日米下水道ワークショップとして継続的に開催されてきました。しかし、昨今の上下水道を取り巻く環境は、流域を一体として捉えた上下水道共通の課題が多いことから、上下水道分野でそれぞれに開催していた日米間の会議を1999年に統合して現在に至っているものであります。会議は、日米双方から上下水道関係の専門家及び行政官が出席して、広く現状報告や意見交換を行い、その成果は両国が施策の展開や技術開発に有効に利用されております。今回の会議には、下水道分野から国土交通省（国総研）の他、北海道大学大学院、土木研究所、下水道事業団、東京都、堺市、下水道機構の14名が参加しました。



LOTUSなど2テーマを発表

現在、日本の下水道が注目すべき課題として、省エネルギー、化学物質のリスク管理、膜分離活性汚泥法、アセットマネジメント、地震対策などが挙げられます。

一方、米国でも、水道水や環境における化学物質のリスクアセスメント・リスクマネジメント、気候変動の水資源への影響及び水の再利用は重要な課題となっており、特に西部地域を中心に、淡水化や新たな下水処理等の積極的な技術の展開が進められているところであります。今回の会議では、それらを含む11議題について日米双方から38編の発表があり、討議がなされました。本機構においても森島、林の2名がLOTUS技術および合流改善技術（SPIRIT21）の発表を行いました。



上下水道施設の視察

本会議では、それぞれの課題発表のほか、フーバーダム、浄水場、下水処理場等の視察を行いました。ラスベガスは年間の降雨量が100mm程度しかない砂漠地帯に位置しており、下水処理場で処理された水は再利用分を除き、全て水源であるミード湖へ戻されております。また、再利用水についても冷却塔やゴルフ場散水などに積極的に利用されており、貴重な水資源をできるだけ再利用しようとする姿勢が印象的で、それだけに、病原体や内分泌攪乱化学物質、消毒副生成物といった問題が身近に感じられました。一方、日本国内に目を向けると、上下水道の共通の問題を有しながら、それぞれが独自に施策を展開されることが多く、改めて上下水道の連携強化の必要性を感じました。



会議の様子



フーバーダム